

（二〇二三年六月）

「お父さん、今度の夏休みには京都に旅行に行きたいんだけど、五万円を貸してくれないかなあ」

「えっ?! 京都に? 彼氏と? 二人だけでって云うのはダメだよ」

「えっっ! どうしてえっ!」

「あつたりまえだろ。男っていうのはなあ、皆んな狼なんだぞ! 昔、ピンクレディーという二人組アイドルが歌って大ヒットしていたもんだよ。『男はオオカミなのよ、気をつけなさい』ってね」

「大丈夫よ。彼は凄く真面目でイイ人なんだよ!!」

「大丈夫な訳ないだろ!! ちゃんと、歌詞の続きにも有ったよ。『羊の顔していても心の中は、オオカミが、牙を剥く、そういうものよ』って。テレビやラジオからは毎日のように流れてたよ。だから、ダメに決まってるだろ!! とにかく反対なのに、お金を貸してくれて言われたって、そりゃあ無理に決まってるだろ!!」（まあ、お金が無  
いと言えば、無いんだが…）

「お父さんだって、昔、若かった頃には彼女くらいは居たでしょ!!」



「エッ……😲（何と云う、痛いところを……）。いや、まあ💧。居なかつたかなあ……💧。その頃には、いつも、周りは男友達ばかりだったからなあ……😞。もつぱら、天下国家の話ばかりしてたもんだよ😏。だから、女性との出会いの機会なんてのは、……あんまり、否、滅多に無かつたなあ💧💧」



「うっそだあ！ お父さんは、出会いの機会が無かつたんじゃないやなくて、機会はあつても、それを生かさなかつただけなんだよね（笑）」



「……😲」  
 “生かさなかつただけ……”と云うのか、“生かせなかつただけ……”と云うのか、日本語の構文上では、“せ”と“せ”の一字違いなだけなのだが意味の方は大きく違ってゐる。

どちらかと云うと、私の場合には後者の“せ”方に該当していた様な思い当たりは無いものでもない様な……💧

悲運な青少年時代を遡ってみるに、やはり、女性の少ない環境ばかりを歩いていたのが現実ではあったのだから、出逢いの機会と云うのは、自ずと少なかつた様なものが……😲

只、そういう風に言われてみれば、その様な場面と云うのは、これ迄の人生上におい



ても、身近な処であれ、国の内外であれ、確かに、記憶上での幾度かはあった様な気がしないものでもない様だ。。。😓

半世紀以上前の若かりし頃を遡り顧みるに、貴重な体験や懐かしい思い出の数々と云うのは走馬灯の様に浮かんで流れ、また遠くへと消え去って行く様だ。

人生上では、実に、無数の人との出逢いと別れを繰り返して来たものであり、また、無数の分岐点での選択肢の機会と云うのもあったものだと思う。

只、結果的には、常に、何れか一本の道だけを選択して辿って来たものであり、後での振り返りに際しては、他の道を歩んだ場合との比較検証は出来ないのだが、誰であれ、もし、かの分岐点での機会に他の道を選んでいたり、或いは他のパートナーを選択していたとしたら、以降の人生での風景と云うものは果たしてどのように異なっていたものだろう。少なからず、今とは大きく変わったものにはなっていたことだろう。

そう言えば、丁度今から五十年前に、スイスのインターラーケンでのユースホステルに宿泊した際には同宿相部屋だったアメリカ人のステイプからは、先の我が娘に突き込まれた内容と、ほぼ、似た様なことを言われた機会があったのを、ふと思ひ浮かんだものだった。

「羨ましい話だなあ……。 だけど、折角の、そんな貴重な機会がありながら、どうして君はそれを生かさなかつたんだい？ オシには理解が出来ないよ。 オシだったら、そのままに長居の居候を決めて……」と畳みかけられたものだった。

その時の彼からの後押しみたいな一言が無かつたとしたら、以降でのセダンでの再会の機会や物語も生まれなかつたことは否めないのだが、それにしても、思い起こしてみると、あれから既に、半世紀と云う大きな時の流れがあつた。

それにしても、“五万円”と云う金額からでは、丁度、半世紀前の羽田からの出立時に持ち合わせていた現金の全財産であつたことも思い出す……。

ードルが二七〇円代前半辺りだった頃の時代背景ではあつたが、往復航空券と欧州鉄道パス券を除いた五万円と云うのが手持ち資金の全てではあつた。

以後での七十日間には及んでの海外への出立としては殆ど“無銭旅行”に近い様な趣であり、当初からの、やや、リスクの伴う事情ではあつたことだろう……。

ともあれ半世紀と云う、丁度、大きな節目の機会でもある様な気はしたので、時の流れを遡りつつ、記憶の糸を手繰ってみることにした。

静かに目を閉じると、人生と云う長旅の中での半世紀前の放浪時に出逢つた人々や思い出のシーンのひと「ママ」、ひと「ママが瞼の裏に次から次へと浮かんで来るよう様だ。